

8-9		主題	褥瘡予防、自立支援を目的としたシーティングの取り組み	
褥瘡		副題	シーティングの取り組みの成果報告	
シーティング				
研究期間	36ヶ月	事業所	特別養護老人ホーム 日の出ホーム	
発表者：森谷 陽一（もりや よういち）				
共同研究者：日本医療科学大学 木之瀬 隆教授 日の出ホームシーティング研究会				
電 話	042-597-2021	メール	Youichi-Moriya@h-sunrise.com	
FAX	042-597-1973	URL	http://www.h-sunrise.com/	

今回発表の 事業所や サービスの 紹介	介護老人福祉施設 200 床、併設の在宅サービスセンターひので理想郷の園定員 40 名、デイサービスセンターサンライズ平井っ原定員 15 名、小規模多機能居宅介護、SS15 床、居宅介護支援事業所、訪問介護員養成研修事業の 7 事業を運営。法人理念「安心と充実の人生を一緒に」を掲げ、サービスの提供を目指している。
------------------------------	---

《研究前の状況と課題》 2006 年より褥瘡対策委員会が設置され介護士がブレデンスケールを調査していた。（入所者は年 1 回、新規入所者は入所時、褥瘡発生時に調査する）月 1 回の会議が実施され、12 点以下の方（17 点や 14 点では対象者が多すぎるため）、及び褥瘡発生者を高リスク者とし「褥瘡予防・悪化計画書」を作成。主にベッド上での体位交換、ベッドマットレスの選定、湿潤、栄養に関する評価・対策の検討がされていた。褥瘡発生者は褥瘡 IAET ステージ（以下、ステージ）Ⅱレベルからカウントされていた。しかし、車いす使用上での褥瘡なのか検討の機会はなかったため 2008 年より自立支援と褥瘡の改善を目的にシーティングの取り組みを開始した。 《研究の目標と期待する成果》 自立支援と車いす上での褥瘡の対策の両面に対する効果を期待し、シーティングコンサルタントと共にシーティングの取り組みを

行なった。約 1 年の経過報告から今後の課題を検討することを目的とする。 《具体的な取り組みの内容》 2002 年より、介護スタッフで組織した「日の出ホームシーティング研究会」（以下、研究会）があり車いす上での身体拘束をゼロにする活動に取り組んでいた。研究会の目的を 2008 年より修正し、構成メンバーを再編成した。 ■研究会目的 車いす上で起こる弊害やその要因を取り除き、個人に合った車いす・クッションを選定する。 ■研究会構成メンバー ・1フロア（約 50 名）で 1～2 名ずつ選出された介護スタッフ 6 名、うち介護士 2 名が褥瘡対策委員会に属している。また、介護スタッフ 6 名中、4 名は 1 年でメンバーを入れ替えるようにし、研究会の趣旨を浸透できるようにした。

- ・OT1 名は褥瘡対策委員会の両方へ関わる。
- シーティング相談日（2 ヶ月に 1 回）

【場所】当施設リハビリ室【時間】13：30～16：00【参加者】ご本人、ご家族、非常勤 OT、常勤 OT、研究会メンバー（介護職）、シーティング対応の事業者各 1 名（2、3 社）

■対象者

08 年「褥瘡発生者及びすり落ち等のリスクのある方」

09 年「褥瘡対策委員会から得た情報」「ブレーデンスケール 12 点以下の方」

※研究会の会議で、座位による褥瘡の可能性があります。車いす・クッションの適合の必要性の高い方を選出した。褥瘡予防に加え、車いすの操作性や食事動作の改善をニーズとしている方も含まれた。

《取り組みの結果と評価》

■褥瘡対策について

- ・相談件数 28 件中減圧を目的としていた方の対応は 27 件。
- ・3 名に褥瘡（ステージⅡ）があり個別離床プログラムをケアプランに入れた結果、坐骨部の 2 名は治癒。1 名は尾骨部に治癒と再発を繰り返した。
- ・尾骨部に再発を繰り返していた方は座位以外の要因が考えられ（ベッド上の圧迫、浴室ストレッチャー移乗時の出血）褥瘡対策委員会へフィードバックされた。
- ・治癒者 2 名中 1 名はその後死去され 1 名

は坐骨部の褥瘡治癒後、クッションの誤用（前後の間違い）により再発された。

- ・予防的に減圧を目的とした方の新規褥瘡発生はなかった。

評価＞クッションの正しい使い方を学ぶ機会は継続的に必要であると考え。さらに、ステージⅠの対象者について早期に対応できるように内発的に動機付けられる仕組み作りや除圧方法指導、離床時間の調整が課題であると考え。

■自立支援について

- ・車いすスピード操作性の向上を目的としていた方は 5 名→向上と判断 6 名・食事動作に改善の変化→4 名
- ・すり落ちの程度が減る→1 名（※客観的指標はないが、ご本人・介護スタッフの意見、映像の比較により向上と判断した）
- ・トロミを必要としなくなる→1 名（当時の常勤 ST により判断）

評価＞自立支援については、客観的な指標を取り入れる必要がある。

《まとめ》

研究会スタッフを中心とした（生活をよく見ている）介護職員がシーティングの援助を必要とする方のアセスメントに関わり自立支援に繋がる事例を見ることで、それぞれの生活の場で目的を果たせるようにケアプランにシーティングを取り入れる例が見られた。

《提案と発信》

H20 年に厚生労働省から出された「職場における腰痛発生状況の分析について」では、H16 年の調査で腰痛発生場面として入浴介護の移乗で最も多く、原因は移乗 65.1%であり、対策として適正な介護機器の活用等により介護労働者の負担を軽減する作業方法を取り入れることが求められている。シーティングと合わせた移乗機器との適合がこれからの時代の鍵となる。

【メモ欄】